

## 東北復興支援プロジェクト『東北・夢の桜街道運動』とインバウンド戦略

2016年8月22日

東北・夢の桜街道推進協議会

事務局長 宮坂不二生

### 1. 東北復興支援プロジェクト『東北・夢の桜街道運動』とは

- 東日本大震災後の2011年12月、未曾有の被害を受けた東北の復興再生支援を目的に、官民広域連携組織「東北・夢の桜街道推進協議会」が民間主導により設立されました。当協議会の母体となった官民連携・協働の地域づくり団体「美しい多摩川フォーラム」(東京都青梅市、1,500 会員)と「美しい山形・最上川フォーラム」(山形県山形市、4,200 会員)では、民間会員と行政会員がそれぞれ対等の立場で議論を重ね、“緩やかな合意形成”に努め、地域づくりの実践活動を展開していますが、当協議会もその精神に則り、東北復興支援プロジェクト『東北・夢の桜街道運動』に取り組んでいます。これは、日本人にこよなく愛され、かつ東北に広く点在する「コモンズ(共有資源)」としての美しい“桜”を東北復興のシンボルに掲げ、新たに選定した「桜の札所・八十八カ所」を東北復興への祈りを捧げながら巡るという、交流人口増加(=観光振興)による東北復興支援運動です。事業内容が多岐にわたるため、「経済」「環境」「教育文化」を運動の3本柱に据えて推進しています。現在、協議会には、国(外務省をはじめ5省2庁)、東北6県、東京都の行政、公共交通機関、旅行会社、情報通信会社、信用金庫業界、金融機関、民間企業・団体など59会員(うち東京地区は35会員)が参加しており、“共感”の連鎖により相互扶助の輪が広がるなど、幅広い支持を得ております。



### 2. 東北・夢の桜街道運動の展開(国内誘客⇒インバウンド誘客)

- 当協議会では、東北・夢の桜街道運動を10年間の国民運動として推進する旨宣言し、当初2年間は、①広報事業(公式ガイドブック発刊、公式ホームページ開設、ポスター・携帯マップ・チラシ制作、パネル展、ルーシー・ウォーカー監督の映画「津波そして桜」上映会、シンポジウム開催等)、②国内観光誘客事業(バス・鉄道・航空機を利用した旅行商品造成、桜の語り会開催、桜の札所スタンプラリー実施、桜の札所ルートガイドシステム開発等)を軸に運動を展開しました。スタート当初は話題になり、支援効果も上がったのですが、“風評被害”が持続する一方で、“震災の記憶の風化”もあって、東北への観光客の回復は伸び悩みました。考えてみると、地方景気低迷のもと、全国各地では限られた国内観光客のゼロサムの奪い合いというのが現実であり、今後「旅で支える東北」を安定的に継続していくためには、増やせば増やしたただけ経済効果が上がる訪日外国人観光客(インバウンド)誘致事業を導入したほうが効果的で、日本の成長戦略にも貢献できると思われました。因みに、観光庁や総務省の最新データによれば、定住人口1人当たりの年間消費額は、インバウンドわずか8人分の旅行消費額に相当するので、いかに交流人口増加による効果が大きいかが分かります。

- 政府は2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会を展望し、当初2,000万人のインバウンド誘客目標を掲げましたが、当協議会でも「インバウンド戦略」として、親日家で大震災に際して多額の義捐金をお寄せいただいた“台湾”にターゲットを絞り、①2013年春に台湾の日系旅行会社に「東北・夢の桜街道」の旅行商品を造成していただきました。また、②翌年の春には、台湾の地下鉄1編成6両の車体にラッピング広告を施した「東北・夢の桜街道」号を1か月間走らせる「春の訪日プロモーション事業（観光庁）」を実施したところ、桜の愛好家が多い現地で大きな反響を呼び、インバウンドも3割方増加しました。さらに、③2015年春には、台湾で開催された日本博（Touch The Japan）の観光庁ブースにおいて、「東北・夢の桜街道」の写真パネル展を開催したほか、桜の札所の携帯マップ（台湾語版）を配布しました。一方、台湾以外では、④昨年、イタリアのミラノで開催された「ミラノ万博」の日本館において、“和食と食文化”が紹介される中、農林水産省の要請で日本の美しい桜として「東北・夢の桜街道」の画像を提供し、花を添えました。



観光庁による台湾の地下鉄車体広告

### 3. 『東北酒蔵街道』の導入（東北復興支援の通年化）

- 春の東北・夢の桜街道運動の各事業が成果を上げる一方、他の季節でも東北復興支援事業を展開できないかとの声が寄せられる中、昨年10月に山形県で開催された『東北・桜サミット』（震災5年目を迎えるにあたり、東北・夢の桜街道運動を総括すると共に、記念シンポジウムで今後の復興支援運動の方向性を議論）において、新しいプロジェクトを発表しました。まず、①和食がユネスコの無形文化遺産に登録されたことを踏まえ、日本の食文化として密接な関係にある“日本酒”に着目、国内でも有数の酒処である東北の“酒蔵”を、秋からの“新酒”シーズンに紅葉や温泉を満喫しながら巡る『東北酒蔵街道』を経済産業省の支援も得て創設しました。東北の参加80酒蔵と紅葉・温泉スポットを調査し、本年4月より公式ホームページや携帯マップで紹介すると共に、酒蔵巡りをサポートするスマホ版「東北桜旅・酒蔵旅の無料ナビ・アプリ」も開発しました。一方、②東北復興支援運動に夏・冬を含めて通年化を図るべく、日本の四季の中でも特に美しい東北の四季を表現する『四季“感動”の東北往還道』（春の桜街道、夏の祭り街道、秋の酒蔵街道、冬の雪見街道）構想を発表しました。東北の桜、祭り、酒蔵、雪は、キラ



東北酒蔵街道のロゴマークと東北酒蔵旅ナビ

コンテンツです。これを縦糸に、温泉、和食、紅葉、新緑、城郭、寺社、川下り、山岳、パワースポットなどの既存の伝統的な観光資源を横糸に“編み込む”と、ストーリー性のある魅力的な体験型の東北観光周遊ルート、即ち「東北往還道」が縦横に出来上がります。ここでもインバウンドの増加に期待が寄せられています。美しい東北の四季を一つでも体験すれば、インバウンドは他の季節を求めてリピーターになること請け合いです。以上が東北・夢の桜街道運動における「経済」軸の概要です。なお、「環境」軸では、津波被災地で桜の植樹を毎年実施しているほか、「教育文化」軸では、東北地区20信用金庫が、しんきん桜守制度のもと、小学校・幼稚園等と連携し、郷土愛を育む「子ども対象の桜の絵画コンクール展」を開催していますが、「次代を担う子どもが地域を元気にする」として、市民や教育関係者からも高いご評価をいただいております（今年は302校・園、11,915名が自由応募）。

#### 4. 今後の展望・課題

- このように「東北・夢の桜街道運動」では、人口減少時代の定住人口減少のもと、今後も国内は勿論のこと、インバウンドによる交流人口の増加（＝観光振興）に努めますが、中でも、「東北酒蔵街道」については、更なる深化を考えています。東北・夢の桜街道（花見酒～花見体験）、東北祭り街道（祭り酒～夏祭り体験）、東北酒蔵街道（新酒～酒蔵体験）、東北雪見街道（雪見酒～スノー体験）と整理して通年の体験型ツアー商品を造成し、インバウンドも対象とする『四季が彩る“東北酒蔵街道”』観光事業として推進します。なお、今年度は東北酒蔵街道の参加酒蔵の拡大（80酒蔵→130酒蔵）、東北酒蔵街道スタンプラリーの導入等を計画しているほか、新しい試みとして、「東北酒蔵街道民泊」調査も開始します。今後、インバウンドの更なる拡大のためには、公式ホームページ、携帯マップなどの多言語化、二次交通の整備等が課題となっています。
- 東日本大震災発生後5年あまりが経過する中、人々の震災に対する“記憶の風化”が進んでおりますが、東北復興という社会的かつ長期的な企業の取り組みにおいては、従来からのCSR（企業の社会的責任）という考え方だけでは、利益を追求する企業として、「支援の継続」に限界があります。このため、当協議会では、新たにCSV（共通価値の創造：Creating Shared Value）という「社会的課題の解決と利益の創出を両立させる企業行動」の経営理論を取り入れ、東北復興支援運動を息長く継続していく予定です。また、今後、東北各県で実施に移される「地方創生に係る地方版総合戦略」に関連し、「東北・夢の桜街道」や「東北酒蔵街道」などが、県の施策の一つとして連携できないか、東北各県に働きかけていきたいと思っています。さらに、外務省と連携し、「東北・夢の桜街道運動」、特にジャパン・ブランドである“桜”や“日本酒”と関連付け、在外公館等を通じて東北をPRしていただければ有り難く存じます。
- 以上のとおり、当協議会では、官民広域連携・協働推進（＝相互扶助）の精神で「東北・夢の桜街道運動」に引き続き真摯に取り組むほか、当協議会をプラットフォームに、協議会メンバーがコンセプトや情報を共有して“共創”する「オープン・イノベーション」などにより、東北復興支援に多面的に寄与し、持続可能な地域社会を実現する『ソーシャル・イノベーション』を目指してまいりたいと考えております。